

維摩經義疏に見える外教について

渡 部 孝 順

一

仏教、即ち内教の注釈書に論語や老子等の外教を引用することは支那仏教にも見られるところである。

例えば吉藏の勝鬘宝窟に「漢書」⁽³⁾「世俗」⁽³⁾「外書」⁽³⁾「俗書」⁽³⁾「外書」⁽³⁾「世俗」等の語を用いて六処位見える。

吉藏の場合、仏教と同説、或いは仏教理解のための補助的役割、そして亦、外教よりは仏教の方が勝れてをる事を説く等、いろいろである。

これとは逆に、智顗の維摩經玄疏には「未代時在⁽⁷⁾師子身内⁽⁷⁾蟲法師禪師云⁽⁷⁾莊老教与⁽⁷⁾三仏教一種」と、外教を仏教と同じように取り扱う法師、禪師を仏教界に於ける師子身中の蟲とまで極言する教家もおった。

聖徳太子の場合には維摩經義疏に外教を引用すること次の如く計九回引用されている。

即ち、仏国品に「外論云⁽⁸⁾と論語、弟子品に「外老子亦云⁽⁸⁾」

維摩經義疏に見える外教について（渡 部）

と老子、問疾品に「外論云⁽⁸⁾」と論語、菩薩行品に「外老子亦云⁽⁸⁾」と老子、「又書云⁽⁸⁾」と尚書、「百行云⁽⁸⁾」⁽⁸⁾「外老云⁽⁸⁾」と老子、「春秋伝曰⁽⁸⁾」⁽⁸⁾「外論云⁽⁸⁾」と計九回を挙げることが出来る。

次に引用文ではないが、菩薩品に「天下事品⁽⁸⁾」、問疾品に「天下道理⁽⁸⁾」、亦、法華義疏安樂行品に「天下萬行⁽⁸⁾」と、外教が好んで用いた「天下」という文字を使用すること三回に及んでいる。

そして、聖徳太子は内教、外教の問題について「内外異なると雖も、必ず、その言乖かざる也⁽⁸⁾」と、人の道、即ち精神向上のためには内教も外教も異なるところは無いであろうと云う態度であった。

しかし、仏教以外の、所謂外教は国家社会に於ける一般の平和安泰に繋がる教えであり、謂はば、世間法、即ち王法に属するものと考えられる。

内教、即ち仏教は一人一人の人間の解脱に属する教えであり、特定の国家社会を超越した人類への教えである。

太子が十七条憲法の第二条「篤敬三宝」中に説かれておつた「四生之終帰、万国之極宗」と、生きとし生けるものへの教え、謂はば出世間法、即ち、教法に属するものである。

世間法である王法は現実社会の法であり、教法は理想社会の教えであつて、王法の上に許さるべき範囲内の教法を採用すると云う賢明さを求められるのが皇帝菩薩の在り方と云うものであらう。

梁の武帝は伝統的支那文化である五經博士をおき、孔子廟を祭るなど、外教に関する功績は見逃すことの出来ないものがある。

これと同時に、新しく将来した印度仏教文化に対しても、皇帝菩薩、救世菩薩とまで称せられたほどの篤信者であつた。

しかし、武帝は王法と教法との板ばさみとなり、後世の歴史家に仏法に溺れた皇帝と酷評される生涯を終つた。後世政教分離を論じられるようになったのも無理からぬことである。

仏法が国家統治のために裨益する事を説いた仏典も屢々散見するところではあるが、一国の皇帝が王法と仏法との両輪を如何に捌くかが問題であらう。

聖徳太子が「内外殊なると雖も、必ず是の言乖かざる也」と仰せになり、三經義疏の中に外典を引用されておつた。

引用された外典を、仏法の中にどのように消化されようとなされておつたか、更に一步突きすすんで、外教そのものをもつて、直ちに成仏道に繋がると云う、お考えを持たれておつたのではなからうかと云う、疑ひさへ浮かんで来るのである。

却説、今回は維摩經義疏の仏国品と問疾品とに引用されておつた論語の二句について記して見たい。

二

「第四問曰、既言^{（一）}土是累法^{（二）}故諸仏^{（三）}本無^{（四）}己土^{（五）}、諸菩薩等亦不^{（六）}求^{（七）}者、只^{（八）}応^{（九）}以^{（一〇）}無相^{（一一）}教^{（一二）}化^{（一三）}衆生^{（一四）}令^{（一五）}入^{（一六）}仏道^{（一七）}。何故猶勤^{（一八）}淨因^{（一九）}使^{（二〇）}得^{（二一）}此累法^{（二二）}耶、外論云^{（二三）}己所^{（二四）}不^{（二五）}欲^{（二六）}勿^{（二七）}施^{（二八）}於人^{（二九）}」の問いは十重問答の第四勸生淨土章に見えるもので、国土は修行の妨げとなる煩惱の固まりのようなものである。従つて仏や八地以上の法身菩薩には己が土と称するものはなく、諸菩薩も己が土を求めようとはしなかった。

仏や八地以上の法身菩薩は、唯、衆生の国土に応現し、衆生のために無相の理を説き、仏道に入らしむるのが本来の役目なのである。それにも拘はらず、猶且つ、衆生に淨因を勧めて累法なる淨土に生まれることを勧めるのは可笑しい。

仏菩薩が求めようとしなかったものを衆生に勧めるのは間違っているのではないか、外教である論語でさへ「己の欲

せざる所は人に施すこと勿れ」と誠しめてゐるではないかと、太子は強調されているのである。

太子が引用された右の一句は、論語の「子貢問曰、有_リ一言_ニ而可_ニ以_テ終_レ身_ヲ行_フ之_者乎。子曰、其恕_カ乎。己所_レ不_レ欲_ス勿_レ施_ス於_人」なる一文の最後の一句である。

子貢が、一生涯に亘り、行つてさしつかえない名言というものがあるでしようかという質問に対し、それは「おもひやり」即ち「恕」とでもいふべきであろうか。今少し、具体的に言うならば「己の欲せざる所、人に施すこと勿れ」という一言が、それに当嵌まるであらうと、孔子が答えられた。

孔子の答えられた「己所_レ不_レ欲_ス勿_レ施_ス於_人」の一句は「一生涯、身に行つてさしつかえない」名句であるという論語を、太子は読んでおられたに相違ない。

その名句を、太子は維摩經義疏に於ける淨土往生という問題と、無相の理を以て成仏するという問題とは、仏道修行者にとって、正しく一生涯の問題である所に引用されておったのである。

三

維摩經義疏問疾品に「『以_ニ己_ノ病_ヲ、慙_ニ於_彼疾_ヲ』者、應_ニ為_ス說_ヲ以_レ己_ノ方_ヲレ人_ニ、今我輕苦_ヲ爾_ヲ、况_ニ乎_三塗之重苦_ヲ哉。則_ニ慙_ニ施_ス人_也。外論云、能近取_レ譬_ヲ可_レ謂_ニ仁_ニ之方_ニこと、太子は再

び、論語を引用されての注釈である。

『以_ニ己_ノ病_ヲ、慙_ニ於_彼疾_ヲ』の一句は、文殊菩薩が有疾の菩薩を教化するに当り、如何なる方法で慰め諭すべきであらうかと言ひ問ひに対し、維摩居士が答えられた中の一句である。

太子は右の一句を捉え、衆生を教化しようとする場合には、我が身の経験した身近かな立場を以て法を説くべきである。

即ち『己れの病を以て』軽い苦しみであらうと、餓鬼、畜生、地獄の三塗の重苦であらうと、我が身の上のこととして『彼の疾を慙む』という親切さを以て教え導くという、身近な立場を採るべきである。

外教にも「能く近く譬を取る、仁之方と謂うべし」と教えてゐるではないかと論語を引用されて、太子は強調されてゐる。

太子の引用された右の一句は、論語の「子貢曰、如_ニ有_下博士_ヲ施_ス於_民而能_ニ濟_ス衆_ヲ何_ニ如_ニ可_レ謂_ニ仁_ニ乎。子曰、何事_ニ於_仁、必_ニ也_聖乎。堯、舜其猶病_レ諸。夫仁者、己欲_ニ立_ニ而_レ立_レ人_{、己欲_ニ達_ニ而_レ達_レ人_{。能近取_レ譬_ヲ可_レ謂_ニ仁_ニ之方_ニ也己}」の最後の一句である。}

右の一文を諸橋博士の講義を参考としながら述記すれば「子貢が、もし、国民全体のために政治を執り、生活苦を救

済するならば仁者と申すことが出来ませうかという質問に対し、孔子は、それは仁者どころではない、聖人といってよろう。

いにしへの聖天子といわれた堯・舜でさえ、なかなか出来ないと苦心されておったからである。

それはそれとしても、子貢よ、なんじは『仁』というものを高遠なものとして考えているようであるが、仁はもつと身近な所もある仁者は自分が身を立てたい、地位に立ちたいと思う場合には、まづ以て人の身を立て、人を地位に立ててやる。自分が事に通達したい、顕位高官に達したいと思う場合には、まず以て人を事に通達させ、人を顕位高官に達せしめてやる。ごく手近かに我が身の上にたとえを取って、自分の心に考え、それを推して人に及ぼして行く、これが仁に到達する方法であると教え答えられた。」

博士の講義は更に「近く譬を取るとは、例えば人の飢寒を思いやる時、もし自分たちがそうであつたらどうであろうかと、自分の身の上の事として考えて行くことであつて、いわゆる恕の道である」と補足されている。

即ち、子貢が天下国家という高遠な立場から、仁というものを考えているが、仁の道というものは、自分が高官に立ちたいと思つてゐるならば、自分になる前に人を立ててやる。自分が事に通達したいと望んでおるならば、自分と同じく他

の人を事に通達するよう尽してやるという思いやりをいうのであつて、仁の道は斯うした身近かな所にあるもので天下国家という高遠な所にばかりあるものではないというのである。

それと同じく、元來、仏教は高遠なもの、不可思議なもの、分別を離れたるものとして考えられておつたのであるが、維摩居士が『以己之病、愍於彼疾』という身近かな譬を以て説かれておつた一句に、太子は心惹かれ、「外論云、能近取譬可謂仁之方」と、論語を引用されたのである。

即ち、太子は己れの病の苦しみから他人の苦しみを慰むという身近かな所に菩薩の大悲の尊さがあることを強調されておつた。

四

太子が仏国品に引用された「己の欲せざる所、人に施すこと勿れ」の一句の背景には「一言にして以て身を終うるまで、之を行ふ可き者有りや」の一句があつた。

その替りとして、太子は維摩經義疏に於ける浄土往生の問題、無相の理を以て成道する問題等、仏道修行者にとっては一生涯の問題が採り挙げられておつた。

次に、問疾品に引用された「能く近く譬を取るを仁之方と謂ふ可きのみ」の一句の背景には「己立たん欲して人を立

て、己達せんと欲して人を達す」の一句があった。

その替りに太子は『己れの病を以て彼の疾を慍む』と云う、最も身近かなところに仏道があると云う維摩居士の一句が採り挙げられておった。

即ち、仏道は高遠ではあるが、身近かなところにあることを強調せんがために、外教を引用されたものと思われる。

以上を要約すれば「己れの欲せざる所、人に施すこと勿れ」の一句を引用されたのは、仏道は一生涯の問題であることを強調し、「能く近く譬を取るを仁^ニ之方^ニと謂う可きのみ」の一句を引用されたのは、仏道は身近にあることを、太子は強調されておったものと思われる。

附記

1	大正大藏經第三十七卷古藏撰勝鬘寶窟	三頁上終三行
2	"	三頁上終四行
3	"	二二頁下四行
4	"	二五頁中終三行
5	"	二八頁中九行
6	"	二八頁下五行
7	"	五三〇頁中一四行
8	第四天王寺會本聖德太子撰維摩經義疏卷上	五四頁終五行
9	"	一〇七頁終五行
10	"	三一頁四行
11	"	一七七頁終五行

卷下

維摩經義疏に見える外教について（渡部）

12	"	一七七頁終四行
13	"	一七七頁終三行
14	"	一七九頁終五行
15	"	一七九頁終四行
16	"	一七九頁終三行
17	卷上	一九八頁終三行
18	卷下	四七頁一行
19	岩波文庫花山信勝校訳法華義疏下卷安樂行品	一三〇頁終五行
20	四天王寺會本聖德太子撰維摩經義疏卷上	五四頁終五行
21	"	五四頁八行
22	大修館書店発行諸橋轍次著論語の講義	三六九頁
23	四天王寺會本聖德太子撰維摩經義疏卷下	三一頁二行
24	大修館書店発行諸橋轍次著論語の講義	一二九頁

以上

（寺院住職）